http://decfamily.p1.bindsite.jp/2012/

We 15R

No.073　12/09/21

いよいよ

教室にはすっかりそれらしい舞台が出来上がってきた。●●くんに言われて階段も登ってみたが、きっちり出来ているし、それも含めて舞台装置はばっちりできあがっている（ように見える…笑）。隣の14R が黒板側が舞台になっているのに対して、15Rは舞台が窓側と、90度回転した関係になっているのも面白い。

教室外の装飾は、まだ飾り付けられていないが、装飾係の人がすごくがんばっていて、多分イイ仕上がりになりそうだ（ただし、もうちょっとハデでもイイかも…）。見落としがちな出入り口の扉にも丁寧な装飾が施されているし、かなりレベルの高い出来となっている。ビラも●●くんと印刷したし、呼び込みようの小さな看板もデザインが洒落ている。ＢＧＭや照明の準備も進んでいることだろう（…多分）。

ということで、あとは役者諸君である。セリフは完璧に頭に入っただろうか？

よく、「自然な演技」がイイと思っている人がいるが、こと舞台に関しては、ちょっと大袈裟すぎるんじゃないかくらいな方がよい。だいいち、我々が取り組んでいるのは喜劇であり、お客様も喜劇を見に来るのであるから、もうここは思い切って「吉本喜劇」なみの演技でイイのである。

＊

君たちは野田秀樹という名前を聞いたことがあるだろうか。テレビよりも舞台が中心だから知らない人も多いかも知れないが、有名な劇作家であり、演出家かつ俳優でもある。かつて大竹しのぶと同棲していたこともあるが、結婚には至らなかったようである…などと芸能ネタの話をしているのではなくて、彼は学生時代に「夢の遊眠社」という劇団を主宰していた（1992年に解散）のだが、幸せなことに、私は彼が大学で活躍している時代を同時代的に過ごし、大学の学生寮を劇場として公演された当時の舞台は、ほとんど全て見ている。また、彼の劇団に所属していた友人（というか先輩）もいる。

その遊眠社の舞台の特色は、巧みな言葉遊びをふんだんに取り入れたセリフを、肉体を駆使してダイナミックに表現することにあった。野田の書くストーリーは複雑で、一度見ただけでは何が何だか分からない部分もたくさん残るのだが、それでも個々の場面での激しい言葉のやりとりがおもしろくて笑い転げずにはいられない一方、効果的なBGMと証明で切ない感動を盛り上げる演出も巧みであって、その大きな波に翻弄されるような舞台が魅力であった。

しかし、その魅力が、個々の俳優、例えば、今でもテレビで活躍している佐戸井けん太（＝踊るシリーズ）、段田安則、松澤一之、さらに東大教授となっている渡邊泰明などといった個性的な役者たちの、それこそ「ダイナミック」で「大袈裟な」演技に支えられていたのは言うまでもない。

というわけで、役者諸君は役者になりきって、「自分の舞台」を精一杯楽しもう。